

訪問看護師が自ら超音波でアセスメントすれば よりよいケアにつながる

東灘区・東神戸病院（内科・在宅科） 水間 美宏（医師）

【はじめに】

医療者がフィジカルアセスメントの道具として超音波装置を用い、ケアに役立てる試みがあり、Point-of-Care 超音波（POCUS）と呼ばれる。今回、訪問看護師による超音波検査の実態を知るため質問票調査を行った。

【方法】

兵庫民医連に加盟する訪問看護ステーションの看護師 189 名に質問票を送り、152 名（80.4%）から回答を得た。

【結果】

98%は超音波検査をしておらず、ハードルは技術的能力 96.1%、画像送信による連携 46.1%、検査時間 44.1%等だった。役立つと思う病態は排尿 69.1%、胸水 60.5%、腹水 57.2%、便秘 44.1%等だった。

【結論】

POCUS のプロトコルによれば、容易に短時間で検査を行える。画像を送信し連携すれば質の高いケアにつながる。研修には排尿、便秘、胸水、腹水等で、講義とハンズオンを組み合わせるとよい。今後、訪問看護の場で POCUS が普及することを期待する。